Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-21

日英語における命令文の特性と意味制約

井原, 駿

(Citation)
国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要,56:25-49

(Issue Date)
2021-07

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012925

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012925

KOBE UNIVERSITY

日英語における命令文の特性と意味制約

井 原 駿

1. はじめに

2000 年以降，理論言語学（とりわけ形式意味論や統語論）における命令文（imperatives）の研究は目覚ましい成果を挙げている。特に，Portner（2004）において「命令文から得られる義務や行為要求のようなモーダル的意味解釈は，全て語用論のレベルにおいて定義されるものであり，意味論レベルの表示（denotation）として生じる訳ではない」という提案が為されて以降は，「命令文の指示する意味表示とは何か」という理論的問いに対して様々な視座から分析が与えられてきた。[1] それに伴い，命令文の振る舞いの記述もまた急速に推し進められ，例えば「ある言語の命令文で観察される現象が他のある言語では観察されない」など，通言語的な命令文の意味の差異も明らかになりつつある（cf. von Fintel & Iatridou 2017）。しかしながら，そのような言語間に見られる命令文の差異や共通点が，自然言語のシステムのどこ（何）に依存しているのかという根源的な問いに対しては，管見の限り，未だ明確な答えや可能性を見出せていない。

本稿では，英語と日本語（ともに現代語）の命令文がそれぞれに備えている意味的・語用論的特徴を，現在までの主要な命令文研究の成果を包括的に参照しながら明らかにする。これにより，先に提示した問いの答えを将来的に導くための足掛かりを作ると同時に，形式的意味論研究の成果が，単なる理論の精緻化や現象の形式化を超えたより深いレベルでの言語記述と対照に貢献することを示したい。さらに，現在までに提案されている命令文の意味理論では，両言語の命令文の振る舞いの差異を統一的に捉えることが困難であることを指摘する。

なお，本稿ではいわゆる命令形で表される命令文（morphologicalimperatives）に焦点を置き，非命令形の命令文（non-canonical imperatives）については考察対象から除外する。また，本稿は紙面の都合上，日英の命令文に見られる意味的・

語用論的な差に焦点を当てるため，統語的な観点（e.g., 統語構造の違いや埋め込みの可否，人称制限）については別稿にて改めて取り上げることとする。

以下，第 2 節では日英語の命令文に見られる共通点を，両者に可能な意味解釈（具体的には，強い読み（strong readings）と弱い読み（weak readings））の観点から取り上げる。第 3 節では，命令文の持つ意味構造を分析するにあたり鍵となる 5 つの観点から，両言語の命令文の振る舞いの差異を観察する。この観察を踏まえて，第 4 節では，命令文の意味研究において競合する 2 つの理論を概観した上で，これら既存の理論では両者の振る舞いを統一的に捉えることが困難であることを示す。第 5 節を結語とする。

2. 命令文における「強い読み」と「弱い読み」

日英語を含む様々な言語の命令文において広く観察される共通の事実として，命令文がいわゆる「強い読み（strong readings)」と「弱い読み（weak readings)」の両方を表出し得るというものがある（cf. Condoravdi & Lauer 2012)。強い読みとは，指示（command/directive）や警告（warning）など，話し手（speaker）が聞き手（addressee）に対して未来のある時点において起こり得る事象の可能性に制限を与える（言い換えると，未来の時点における可能な世界の集合を狭める）ような読みであり，いわゆる必然性モーダル（necessity modals）表現の *must* や *have to* に対応する。

(1) a. 早く行け！ [指示（command）]
　　b. Go quickly!
　　c. You must/have to go quickly!
(2) a. モニターから離れろ。 [警告（warning）]
　　b. Stay away from the screen!
　　c. You must/have to stay away from the screen!
(3) a. お願いだから勉強しなさい。 [要求（request）]
　　b. Please, just study.
　　c. Please, you must/have to study.

（1a,b）–（3a,b）の命令文が必然性を表すことの証拠の一つとして，これらの発話に後続して *but you don't have to* や *whatever*（*you like*）のような必然性と矛盾するような文（すなわち，命題の可能性（possibility）を含意するような文）は容認されないことが挙げられる（Kaufmann 2012）。

(4) a. 早く行け！ ＃行かなくてもいいけど。
　　b. Go quickly, #but you don't have to.
(5) a. モニターから離れろ。＃離れなくてもいいけど。
　　b. Stay away from the screen, #but you don't have to.
(6) a. お願いだから勉強しなさい。＃もう好きにしていいよ。
　　b. Please, just study. #Whatever.

一方，弱い読みとは，許可（permission）や譲歩（concession）など，未来の時点における聞き手の行動の可能性を広げるものであり，英語の可能性モーダル（possibility modals）表現の *may* や *can* に対応する読みである（cf. Davies 1986）.

(7) a. もし良ければ明日の仕事は休め。　［許可（permission）］
　　b. Take tomorrow off if you like.
　　c. You may/can take tomorrow off, if you like.
(8) a. 試験に落ちてもいいと思うなら遊びに行け。［譲歩（concession）］
　　b. Go out and play if you think you can fail the test.
　　c. You may/may go out and play if you think you can fail the test.

これらの「弱い」命令文は，以下（9），(10）に見られるように，必然性と両立不可能な後続文と問題なく両立する。

(9) a. もし良ければ明日の仕事は休め。休まなくてもいいけど。
　　b. Take tomorrow off if you like, but you don't have to.

(10) a. 試験に落ちてもいいと思うなら遊びに行け。もう好きにしていいよ。
b. Go out and play if you think you can fail the test. Whatever.

特筆すべきこととして，英語の *should* や *ought to* のようないわゆる *weak* necessity モーダルは，*must* や *have to* のような *strong* necessity モーダルと異なり，これまでに例示したような強い読みと弱い読みの両方が可能であり，その点において命令文と並行的な振る舞いを見せる（Ninan 2005, Portner 2007）。

(11) a. You should study right now! #But you don't have to. （strong reading）
b. You should take tomorrow off if you like, but you don't have to.
（weak reading）

次節にて取り上げるように，命令文におけるこれらの読みの強弱は通常は文脈依存的である一方で，文末に付随するイントネーションや命令文の生じる統語的環境によっても決定され得ることが知られている。また，本稿では詳しくは取り上げないものの，同じ言語でも全ての形式の命令文が弱い読みを許す訳ではないことには注意されたい（e.g. ヘブライ語・ドイツ語のデータについては von Fintel & Iatridou 2017, 日本語については Ihara & Noguchi 2019, Ihara to appear 参照）。

3. 日英語の命令文に見られる振る舞いの差異

本節では，日英語の命令文に見られる意味論的･語用論的振る舞いの差異を，これまでに対照されてこなかったような以下の 5 つの観点から観察する。

- 疑問上昇調イントネーション（question/rising intonation）の可否
- 無関心（indifference）読みの可否
- 過去事象（past events）への言及の可否
- IaD（Imperative-and-Declarative construction）における支持（endorsement）の有無

・修辞命令（rhetorical imperative）の解釈の可否

3.1 疑問上昇調イントネーションの可否

近年の発話行為研究では，文末のイントネーションが断定文（assertion）や疑問文（question）などの発話行為文に与える談話効果とそのモデル化に関心が寄せられており（Gunlogson 2003, Farkas & Bruce 2010, Jeong 2019 など），最近では命令文も考察の対象になっている（Portner 2018, Rudin 2018）。通常，英語の命令文では下降調（H*L-L% tune）または平調のイントネーションを用いることで指示の行為を表出するが，疑問上昇調（L*H-H% tune）が用いられた場合は，指示よりも弱い，提案（suggestion）のような談話効果が生じる（Portner 2018）。例えば，以下（12a）のような下降調命令の場合，直感的には聞き手に対して単純に「お礼の手紙を書く」ことを指示しているように感じられるが，（12b）のように疑問上昇調で発話された場合，話し手は聞き手に対して「お礼の手紙を書く」という一つの可能な行動のオプションを提示しているに過ぎないように感じられ，これは前節で取り上げたような「弱い」命令文の一つとして位置付けることができる。言い換えると，(12a)は必然性，(12b)は可能性を表出するという点で解釈に差がある。

(12) A: I really like this present grandma gave me.
  a. B: Write her a thank-you note. （“.”: H*L-L% tone）
    （= ‘You **must** write her a thank-you note.’）
  b. B: Write her a thank-you note? （“?”: L*H-H% tone）
    （= ‘You **could** write her a thank-you note.’）

上記の直感的な差は，*I insist* を用いたテストで確かめることができる（Rudin 2018）．以下のように，通常の下降調命令文では，*I insist* を用いてその命令を強調することを許容するのに対して，疑問上昇調命令文では *I insist* の後続は不自然である。

(13) a. Have a cookie. I insist.
b. Have a cookie? #I insist.
(cf. You could have a cookie. #I insist.)

日本語における命令文の文末にどのようなイントネーションが付随され得るかに関しては，上昇下降調（HL%），強調（H%），あるいは平調（∅）などの可能性があり（Venditti 2005, cf. 郡 1997），未だ議論の余地が残されていると言える。 ここでは日本語命令文に付随するイントネーションパターンに関する詳しい議論は避けるが，少なくとも，日本語では英語のように疑問上昇調のイントネーションを用いて命令の効果を弱めることは困難であることを指摘する。以下（14b）のように，通常，命令形命令文に疑問上昇調イントネーションを直接付加することはできない。

(14) a. クッキー食べろ。 (“。”: HL% or H% or ∅)
b. ?? クッキー食べろ？ (“ ？ ”: LH%)

興味深いことに，命令形ではなくテ形を用いたり終助詞「よ」を用いた場合は問題なく疑問上昇調イントネーションを用いることが可能となる。

(15) a. クッキー食べて？
b. クッキー食べろよ？

ただし，（15）の命令文が英語における疑問上昇の命令文と同様の談話効果をもたらしているかどうかは検討の余地があると思われる。例えば，（16a,b）のように，先の *I insist* に対応して「これは譲れない」を（15）それぞれの後続文に生起させた場合，（母語話者によって容認性判断に揺れがある可能性はあるものの，）英語の疑問上昇命令文と比較するとさほど不自然ではない。（（16c,d）のように，「てもいい」のような許可文や「〜を勧める」のような明示的な提案文に「これは譲れない」は後続できず，これは「これは譲れない」

が *I insist* と同様に文の必然性の表出の可否をテストするものとして機能していることを示している。）この事実は，（15）の命令文は（疑問上昇調であるにも関わらず）必ずしも英語の疑問上昇命令文と同等の弱い談話効果を義務的に持つ訳ではないことを示している。

(16) a. クッキー食べて？これは譲れない。
b. クッキー食べろよ？これは譲れない。
c. 君はクッキーを食べてもいい。# これ（＝聞き手がクッキーを食べること）は譲れない。
d. クッキーを食べることを勧めるよ。# これ（＝聞き手がクッキーを食べること）は譲れない。

このパズルに対処するにあたっては，日本語と英語の疑問上昇調イントネーションの持つ意味や談話効果に加えて，そしてテ形命令文の意味や終助詞「よ」の命令文における意味貢献（cf. Davis 2011, Oshima 2014 など）の考察を含めたより仔細な検討が必要である。

3.2 無関心（indifference）読みの可否

第 2 節において，日英語の命令文はともに弱い読みが可能であることを観察した。しかしながら，英語命令文が可能な全ての弱い読みについて，日本語命令文も可能であるという訳ではない。まず，前節までに取り上げた「弱い読み」の例（「許可」，「譲歩」や「提案」）は，どれも発話内容が論理的に必然（necessary）ではなく可能（possible）であることを表すものであった。英語の命令文でこのような弱い読みが可能であるということは，以下の（17a）に例示する「無関心読み（indifference reading, von Fintel & Iatridou 2017）」と呼ばれる，直感的には「話し手が命令内容の好ましさに全くコミットしていないような読み」が許されることからも確かめられる。*must* のような strong necessity はもちろん，*should* のような weak necessity もこの読みの下では許容されない。

(17) a. Go left! Go right! I don't care.
b. #You must/should go left! You must/should go left! I don't care.

前節までで取り上げた許可・譲歩・提案の読みと（17a）に挙げたような無関心読みを（ともに弱い読みでありながら）区別したのは，話し手の命令内容に対する好ましさへのコミットメントの有無という差がある（すなわち，許可・譲歩・提案の読みでは，話し手は何らかの形で発話内容に対する好ましさにコミットしている一方，無関心読みではそのようなコミットメントが無い）ことに加えて，日本語の命令文では無関心の読みを許さないからである。日本語では許可・譲歩・提案タイプの弱い読みが可能であったにも関わらず，以下（18）のように，無関心の用法では矛盾しているような直感が得られる。

(18) # 右へ行け！左へ行け！俺には関係ない。
（意図：聞き手が右へ行こうが左へ行こうが自分には関係ない）

日英語間に見られる当該の差は，日本語の命令文が英語の命令文に比べて「好ましさへのコミットメント」というレベルでは意味的に強いという可能性を示唆するものであるが，必ずしも全てのレベルにおいて英語の命令文の方が日本語よりも強い意味制約がかかっているという訳ではない。次節にて取り上げる。

3.3 過去事象（past events）への言及の可否

日本語の命令文では可能である一方で英語では不可能である振る舞いの事例の一つとして，過去事象（past events）への言及が挙げられる。まず前提として，命令内容が現在（present）から未来（future）のある時点において成立することは，通言語的に見られる命令文の一般的特性である（Mastop 2005, Kaufmann 2012）。例えば，英語の命令文はその命令内容の事象が未来に成立することを義務的に要求にするため，過去における事象の成立は許されず（すなわち，発話時点から見て過去のある時点において命令内容の事象が成立する可能性は排除され），これは以下（18）に例示するような時間副詞との共起関

係からも明らかである。

(19) a. Call me tomorrow!
b. *Call me yesterday!

一方，日本語の場合，その命令内容の成立が過去の場合であっても自然な文として容認される（田川 2019, cf. Ihara to appear)。[2] 以下の例に見るように，日本語の命令文は過去の時間副詞「昨日」と共起し，*should have* を用いた反実仮想文（counter-factual sentences）と同様の解釈を得る。[3]

(20) （部下が，昨日のうちに電話で業務報告をする予定だったにも関わらず今日電話をかけてきた。部下に対して次のように言う：）
お前それは昨日報告しろ?（よ）！
(= 'You **should have** reported that me yesterday.')

田川（2019）で指摘されているように，このようなタイプの命令文は終助詞「よ」＋下降調イントネーションが生起した方がより自然に解釈され，その有無によって母語話者の容認性に揺れが生じるようである（この理由から，本稿では上の例文で「よ」が生起しない場合の容認度を暫定的に "?" としている)。何故このような揺れが生じるかについては,「よ」＋下降調イントネーションの命令文に対する意味貢献や談話効果を含めた考察が必要である（cf. Davis 2011, Oshima 2014)。

3.4 IaD における支持（endorsement）の有無

英語では，Imperative and Declarative（IaD; Kaufmann 2012）と呼ばれる命令文を前件として平叙文を後件とする条件構文が存在する。von Fintel & Iatridou（2017）は，この構文は意味的にさらに 2 つの下位分類が可能であるとしている。その一つが *endorsing* IaD（e-IaD）であり，以下の（21a）を例に挙げると，e-IaD では話し手が「聞き手が一生懸命勉強すること」を支持

する（endorse）していることが含意される。一方で，（21b）に例示する *non-endorsing* IaD（n-IaD）からはそのような支持の含意は得られず，純粋な条件文（すなわち，「課題を無視したらこのクラスの単位を落とす」）として解釈される。

(21) a. Study hard and you will pass the class. [e-IaD]
'You **should** study hard. If you do so, you will pass the class.'
b. Ignore your homework and you will fail this class. [n-IaD]
'If you ignore your homework, then you will fail this class.'
(*'You **should** ignore your homework. If you do so, you will pass the class.')

言い換えると，e-IaD は前件部の命令文が義務（あるいは願望）モーダル（deontic/priority modals）を持つかのように解釈される一方で，n-IaD の命令文ではもはやそのような解釈が無い。

日本語ではどうだろうか。まず，重要な事実として，日本語では統語的に英語のように「前件としての命令文＋後件としての平叙文」の接続を許さず，純粋な IaD 構文形成できないため，日本語と英語の単純な比較は実際には難しいものの，以下の例（22）のように，文の命題を先行要素（antecedent）として条件節を導く「そうしたら」を用いることで成立する〈命令文⇒平叙文〉の論理関係（＝「命令文によって表される未実現の p が成立した場合，平叙文の命題 q が成立する」という関係）から，英語と同様の形で IaD における支持の有無を確認することができる。

(22) a. [$_{p}$ 一生懸命勉強し] ろ。そう $_{(=p)}$ したら君は単位が取れるよ。 [e-IaD]
（意図：単位を取るためには君は一生懸命勉強するべきだ）
b. #[$_{p}$ 課題を無視し] ろ。そう $_{(=p)}$ したら君は単位を落とすよ。 [n-IaD]
（意図：課題を無視したら君は単位を落とす）

（22b）は，n-IaD としての解釈，すなわち「課題を無視したら，その場合君は

単位を落とす」という純粋な条件文の解釈はできない。(22b) を容認可能とするためには，例えば聞き手が何らかの理由でこのクラスの単位を落としたがっている文脈を用意し，「単位を落とすために君は課題を無視するべきだ」という e-IaD の解釈を持たせる必要がある。

以上のことから，日本語と英語の命令文では IaD 構文における支持の有無において差があることが分かる。ただし，興味深い事実として，日本語では n-IaD を形成するために「てみろ」を用いるというストラテジーが存在する（森 2006）。

(23) （もし）課題を無視してみろ。そうしたら単位を落とすよ。 [n-IaD]
（意図：もし課題を無視したら君は単位を落とす）

(23) の前件部が純粋な条件節のように機能していることは，「もし」と共起可能であることから確かめられる（cf.「(* もし) 課題を無視しろ，そうしたら…」）。「てみろ」は命令形ではあるものの，補助動詞「てみる」によって「試行」の意味を表出することで通常の動詞の命令形とは異なる意味貢献をしている可能性が高く，これにより n-IaD の解釈を可能にしていると考えられる。「てみろ」と e/n-IaD のコネクションについて論じた研究は管見の限り存在しておらず，今後の更なる検討が必要である。

3.5 修辞命令（rhetorical imperative）の可否

自然言語の発話行為の修辞的解釈に関する研究は専ら修辞疑問文（rhetorical questions）に焦点を当てたものが殆どである。しかしながら，生産性は低いものの，日本語では命令文に修辞的解釈を持たせることが可能である。Ihara & Asano (2020) では，日本語の修辞命令文（rhetorical imperatives）は見かけ上は非修辞的解釈の命令文（ordinary imperatives）と同じ形式を有している一方で，少なくとも次の二点において通常の命令文とは意味的に異なっており，その点で修辞的であると分析している。

- 通常の命令文 O-IMP(p)は発話時点においてpが未実現であるのに対して，修辞命令文 R-IMP（p）では発話時点においてpが既に実現している
- 通常の命令文 O-IMP（p）では話し手はpについて好ましいと信じているのに対して，修辞命令文 R-IMP（p）では話し手はpについて好ましくないと信じている

具体的なデータとして以下のものを挙げる。“ORD” は通常の命令文の解釈であり，“RHET” は修辞命令文としての直感的な解釈を表す。

(24) a. 嘘つけ！
ORD: ‘聞き手は嘘を付いていない’ & ‘聞き手は嘘を付くべきである’
RHET: ‘聞き手は嘘を付いた’ & ‘聞き手は嘘を付くべきではない’
b. 馬鹿を言え。
ORD: ‘聞き手は馬鹿なことを言っていない’ & ‘聞き手は馬鹿なことを言うべきである’
RHET: ‘聞き手は馬鹿なことを言った’ & ‘聞き手は馬鹿なことを言うべきではない’

管見の限り，日本語以外の言語で先のような修辞的解釈を持つ命令文は報告されていない。実際，英語の命令文では日本語のような RHET の解釈は許されない。[4]

(25) a. Tell me a lie!
✓ ORD: ‘聞き手は嘘を付いていない’ & ‘聞き手は嘘を付くべきである’
*RHET: ‘聞き手は嘘を付いた’ & ‘聞き手は嘘を付くべきではない’
b. Say something stupid.
✓ ORD: ‘聞き手は嘘を付いていない’ & ‘聞き手は嘘を付くべきである’
*RHET: ‘聞き手は嘘を付いた’ & ‘聞き手は嘘を付くべきではない’

本節冒頭でも述べたように，日本語でも全ての命令文で修辞的解釈が許される訳ではなく，実際には修辞命令文の述語として使用可能な動詞の語彙は限られる。(24) のような修辞命令文がそれ自体で文法化している可能性もあるが，その場合であっても，「そもそも何故限られた語彙の使用しか許されていないのか」，「使用できる語彙とできない語彙を峻別する意味的な差は何か」といったことに関しては未だ明らかでないことが多く，通言語的視点を含め調査が必要である。

3.6 日英語の命令文における意味制約のまとめ

本節での観察を以下表 1 にまとめる。次節にて，これらの振る舞いの差について，既存の命令文の意味理論による分析を試みる。

	日本語	英語
上昇調イントネーション	*	✓
無関心の読み	*	✓
過去事象への言及	✓	*
可能な IaD 構文	✓ e-IaD/*n-IaD	✓ e-IaD/ ✓ n-IaD
修辞的解釈	✓	*

表 1：日英語の命令文の意味的振る舞いの差異

4. 理論的考察

意味論における現在までの命令文研究では，主に 2 つの競合する理論―ミニマル理論 (Minimal Theories) とモーダル理論 (Modal Theories) ―が存在する。本節では，まずこれらの理論の要点をテクニカルな部分は避けて概観する。その後，これらの理論では前節で観察した日英語の命令文の差異に対して，(言語間での命令文の意味構造が異なると仮定することなしには) 統一的な分析を与えることが難しいことを指摘する。

4.1 競合する理論：ミニマル理論とモーダル理論

ミニマル理論（Minimal Theories）とは，命令文自体はその意味表示（denotation）として命令演算子（imperative operators）あるいはモーダル演算子（modal operators）を持たないとする理論の一派である（e.g., Portner 2004, 2007, Mastop 2005, Starr 2011, von Fintel and Iatridou 2017）。この理論における命令文 IMP（p）（p: 命題あるいはプロパティ）の意味表示はあくまでも “p” であり，命令文に付随する義務（願望）のモダリティや行為要求のようなモーダル的意味は，統語論や意味論のレベルでエンコードされず，語用論のレベルで実現されるとみなされる。命令文にモダリティ的意味を与える具体的なメカニズムやモデルについては個別の分析によって異なり得るが，本稿では，この一派の中で代表的な Portner（2004, 2007）の枠組みを取り上げる。

Portner は，命令文の意味を動的意味論・語用論（dynamic semantics/pragmatics）を用いて断定（assertions）や疑問（questions）の発話行為と並行的に分析する。断定文は Common Ground（CG, Stalnaker 1978）に命題を追加することで，疑問文は命題の集合を Question Set（あるいは Question under Discussion など）に追加することで文脈を更新（update）するのと同様，命令文も談話上に仮定された To-Do List（TDL）にプロパティあるいは命題を追加して文脈を更新する。TDL とは，直感的に言えば談話参与者（discourse participants）の持つ「やるべき行動（プロパティあるいは命題で表される）の集合」である。[5] 例えば，命令文 “Read this book!” の意味表示は（26）（あるいは単に命題 [λ w. the addressee reads this book in w]）であり，これが定義されると聞き手の TDL は [（the addressee）reads this book] を持つ TDL として更新される。

（26） || *Read this book!* ||^{c} = λ x: x is the addressee in c. λ w.[x reads this book in w]
If defined, [the addressee reads this book] goes to TDL_c(ADDR).

命令文の意味を語用論レベルで定義するミニマル理論に対して，Kaufmann（2012）に代表されるモーダル理論（Modal（or “Strong”）Theories）では，命

令文の持つ義務や行為要求の意味は，命令文が意味表示として持つ命令演算子から表出されると分析する。ミニマル理論と同様具体的な分析は様々だが（Han 2000, Condoravdi & Lauer 2012, 2017, Kaufmann 2012, Medeiros 2013, cf. Oikonomou 2016），ここでは代表的な Kaufmann の提案を概観する。Kaufmann は，命令演算子の基本的な意味は *must* や *should* のような必然性モーダル表現であるとし，これを Kratzer（1981）の様相論理を用いて定義することで，命令文と必然性モーダル表現の意味的並行性に説明を与えている。これに加えて，命令文が固有に持つ振る舞いを前提（presuppositions）として命令演算子の意味に追加することで，「命令文らしさ」（例えば，命令文の未来志向性，命題に対する好ましさ，命題の未実現性など）を定義している。[6] 例えば，命令文 “Read this book!” は Kaufmann の意味論のもとでは（概略）以下のように表される。

(27) $||$ *Read this book!* $||^c = ||\mathrm{OP}^{\mathrm{Imp}}(\text{the addressee reads this book})||^c$
$= \lambda p.\lambda w.\forall w' \in \mathbf{BEST}_{w,c}: p(w')$ iff the presuppositions are met in *c*.

$\mathbf{BEST}_{w,c}$ は，世界 w と発話時点における文脈 c（具体的には，w における状況的事実の集合（circumstantial modal base）と願望や目的などの集合（priority /bouletic ordering source））に基づき順序付けされた最適な世界 w' の集合である。命令文の各前提が満たされた場合，またその時に限り，BEST な世界 w' の全てにおいて p が真である，というのが命令文の基本的な意味となる。紙幅と趣旨の都合上テクニカルな部分への言及は避けるが，ここで重要なポイントは，命令文の意味表示が単に命題 p ではなく $\underline{\mathrm{OP}^{\mathrm{Imp}}}$（p），すなわち世界の量化を伴うモーダルを持つという点である。

ここまでに紹介した2つの理論の違いをより明示的に命令文の論理形式(LF)で表すと以下のようになる。次節にて，これら両理論が第 3 節で観察した日英語の命令文の振る舞いを分析するにあたり，いずれも問題点を残すことを指摘する。

(28) Simplified LF of “Read this book!” based on Minimal Theories
$[_{CP\ (or\ TP)}$ p: [x = the addressee] reads this book]

(29) Simplified LF of “Read this book!” based on Modal Theories
$[_{CP}\ OP^{imp}\ [_{TP}$ p: the addressee reads this book]]

4.2 両理論の予測と問題点

4.2.1 予測 1: 疑問上昇調イントネーションの可否について

まず，命令文における疑問上昇調イントネーションの可否について，ミニマル理論は英語のデータについては問題なく説明を与えることが可能であるが，一方で日本語のデータについては説明が困難であることを指摘する。

Gunlogson (2003) や Farkas & Bruce (2010) の動的語用論の分析に基づき，疑問上昇調イントネーションの直感的な談話効果を「話し手の発話命題に対するコミットメント(直感的には，断定文であれば「命題は真である」とするコミットメント，命令文であれば「命題は好ましいことである」とするコミットメント)を一旦保留する(そしてその判断を聞き手に委ねる)」ことであるとすると，英語において命令文の疑問上昇調の解釈が「提案」のようになることについては捉えることができる (cf. Portner 2018)。すなわち，ミニマル理論では命令文 IMP (p) の意味表示は単に p であるため，イントネーションによって生じる談話効果の意味とも問題なく両立できる。しかしながら，日本語のように疑問上昇調イントネーションの付加ができないような命令文については，この分析を採用した場合，イントネーションの付加が「可能」であるという，事実に反した予測をしてしまう。

ミニマル理論が取り得る救済策としては，少なくとも次の 2 つの方法が考えられる：(i) 日本語の命令文の意味は英語の命令文よりも強い (すなわち，単に “p” ではない) と仮定し，上昇調イントネーションのように命令の意味を弱めるような談話効果とは両立ができないとするか，あるいは (ii) 日本語と英語では上昇調イントネーションの及ぼす談話効果が異なるとするか，である。(i) を採用する場合，ミニマル理論が「ミニマル」たる所以である「IMP (p) の意味表示は p」という仮定を自ら否定する (すなわち，命令文の意味がミニ

マルではない言語の存在を認める）ことになる可能性が高い。一方で，(ii) を採用する場合は，日英語の文末の上昇調イントネーションの談話効果の差を何らかの方法で明らかにする必要があるだろう。

モーダル理論は，両言語についてミニマル理論と反対の予測を立てる。すなわち，日本語については「命令文の命令モーダルの意味が疑問上昇調イントネーションの談話効果と両立しない」と考えれば説明が可能であるが，この分析が正しいとしたら，英語の命令文に上昇調イントネーションが付加できる事実を説明することは難しくなる。ただし，モーダル理論の場合はもう一つのもっともらしい可能性，すなわち「日英語の命令文はともにモーダルを持つが，その意味が異なる（そのため上昇調イントネーションとの両立性に差が生じる）」という可能性を残しており，その点において，現段階ではモーダル理論はミニマル理論よりも当該のデータに対する説明力は高いと考えられる。

4.2.2 予測 2: 無関心読みの可否について

まず，英語の命令文で無関心の読みが可能であるという事実については，von Fintel & Iatridou (2017) が主張するようにミニマル理論を採用すれば説明が可能である一方，モーダル理論ではこれを捉えることはできない。繰り返すように，ミニマル理論では命令文 IMP(p) の意味表示は p である。したがって，無関心読みにおいて “go left” と “go right” という両立できない内容を同時に命令文として表出したとしても意味論的矛盾は回避できる。一方，モーダル理論では命令文の意味は必然性モーダルの意味であるため，両命題を同時に表出しようとすると矛盾が生じる。Kaufmann (2012) では，命令演算子は文脈によって *may* や *can* のような可能性モーダルにもなり得るとしているが，その場合であっても，以下のように 2 つの文が等位接続したデータを考慮に入れると，モーダル理論にとっては問題となる。

(30) a. #Go left and go right! I don’t care.
b. You could go left and you could go right! I don’t care.

もし（30a）の命令演算子の意味が可能性モーダルにもなり得るのであるとしたら，（30a）における文接続は可能であるはずである（cf.（30b））が，実際にはそれが許されない。ミニマル理論では，（30a）は 2 つの矛盾した内容を「同時に」（すなわち一つの発話文として）聞き手の TDL に追加しようとすることにより容認されなくなっていると説明される（von Fintel & Iatridou 2017: 297）。

しかしながら，日本語の場合，両理論は英語の場合とは反対の予測をする。すなわち，モーダル理論では命令文に生起する必然性モーダルの存在により，無関心の読みがブロックされていると説明ができるのに対し，ミニマル理論では日本語も英語と同様に無関心読みを許すと予測してしまう。

以上のことから，無関心の読みの可否が日英語間で異なるという事実は，英語だけを見ればミニマル理論に軍杯が上がるが，実際には両理論の根幹に関わる問題を提起する（すなわち，モーダル理論では英語の命令文がモーダルを持つと仮定することが問題となり，ミニマル理論では日本語の命令文がモーダルを持たないと仮定することに問題がある）ことが分かった。

4.2.3 予測 3: 過去事象への言及の可否について

命令文が過去事象について言及できるか否かに関する両理論の予測は，ミニマル理論であれば TDL に与えられる時制の制約，モーダル理論であれば命令演算子の時制の前提に依存する。本稿ではその詳細は割愛するが，少なくとも両理論ともに命令文は未来のある時点において成立することを制約として課しているため，英語の命令文が義務的に未来志向であることについては正しく予測する。[7]

一方で，日本語命令文の命令内容が過去に成立し得るという事実については，どちらの理論からもこのままでは予測することはできない。ここでは，両理論が当該の事実を捉えるにあたって採ることができる可能な方向性について言及しておく。まず，ミニマル理論の場合は日本語命令文の更新関数（update function）を場合分けすることで英語と差別化するという手法があり得る。例えば，日本語命令文 $\mathrm{IMP}_{\mathrm{JP}}(p)$ の持つ命題またはプロパティ p が定義されたとき，

p が未来の事象を指示する場合は TDL に，もしそうでない場合（すなわち，p が過去事象を指示する場合）は TDL ではない他の談話構成要素（discourse component）（例えば Common Ground など）に p が追加されるとすれば，命令文が過去事象の命令内容を取り得ることに加えて，TDL が過去事象のコンテンツを持たないことを保証できる。モーダル理論の解決策も基本的には同様である。例えば，日本語の命令演算子の時制に関わる前提を改変し，命題の成立する事象が過去である場合にも命令演算子が定義されるように精緻化することは理論的に難しくなく，実際に Schwager（2011）や Ihara（to appear）ではこの方針の分析を採用している。[8]

ただし，当然ではあるが，両理論のモデルを個別言語のために精緻化することで事実の予測ができるようになったとしても，そもそもなぜ言語ごとに異なるモデルが与えられるのか（すなわち，なぜ言語ごとに命令文の時制に関する振る舞いが異なるのか）という問いに答えたことにはならない。命令文が表現可能な時制の柔軟性（flexibility）に関しては，記述レベルにおいても未だ研究は少なく，日本語以外でどのような言語の命令文で「過去の命令文」が可能であるのか，データの観察を進める必要がある。[9]

4.2.4 予測 4: IaD における支持の有無について

von Fintel & Iartidou（2017）は，n-IaD（non-endorsing IaD）の存在をミニマル理論がモーダル理論に比べて経験的に優れている証拠の一つとして挙げている。実際，n-IaD は英語に留まらずギリシャ語，フランス語，アルバニア語など，通言語的にも多くの言語で観察されており（von Fintel & Iartidou 2017: 298），命令文が命令演算子を持たないとするミニマル理論であれば，これらの言語において命令文が（義務や行為要求のモーダル的意味を持たない）純粋な条件節のように振る舞うことを予測できる。より具体的には，ミニマル理論においては命令文の義務や行為要求の意味は語用論的に表出されるため，命令文が主節としてではなく条件節として生起する際はそのような意味を持たずに機能していると考えることができる。これに対して，モーダル理論では命令文に義務的に生起する命令演算子の存在により，IaD 構文は全て e-IaD（endorsing

IaD）として解釈されることを予測してしまうため，モーダルの意味を持たない n-IaD を説明することができない。[10]

しかしながら，von Fintel & Iatridou では IaD において命令文が non-endorsing にはならない日本語のような言語は観察していない。このような言語を説明するにあたっては，モーダル理論のように常に命令文がモーダルを持つとする（すなわち，命令文は条件節においても常に endorsing である）方が都合が良く，反対に，ミニマル理論にとっては日本語のような言語の存在は問題となり得る。ただし，第 3.4 節でも述べた通り，日本語の場合は統語的に英語のような *and* を伴う真の IaD を形成することはできず，実際には一度命令文を発話した後に「そうしたら」を伴う条件文を発話するような形でしか IaD を形成できないため，英語のように命令文そのものが純粋な条件節として機能せず，それ故に non-endorsing になることができない（＝常に endorsing になる）という可能性もあり得る。これについては，各言語（特に日本語）における IaD 構文の前件部（命令形で表される前件節）を，そもそも一般的な条件節と同様のものとして認定して良いかよく検討した上で，先に挙げたような可能性の妥当性を再度吟味する必要がある。

4.2.5　予測 5: 修辞的解釈の可否について

日本語の命令文において修辞的な解釈が可能であることについては，どちらの理論からも語用論的な説明があり得る。具体的には，以下のように皮肉等を含む一般的な修辞的発話と同様の推論のステップが考えられる。

i. 命令文は，事象成立における時制や命令内容に対する話し手の好ましさに関わる前提を持つ。
ii. 修辞命令文ではそれらの前提が話し手により違反される。
iii. ii. における前提違反をシグナルとして，話し手がこれらの前提を前提違反と知りながらも敢えて違反するのは，それと反対の発話意図があるからであると推論され，これによって修辞的解釈が生じる。

例えば,「嘘つけ！」という修辞命令では，命令内容で表現された「相手が嘘をつく」という事象が既に起こっていることが談話において共有されている（＝ Common Ground の一部として成立している）文脈で，それを命令文として発話していることにより時制の前提の違反が起こっている。これに加えて，文脈において「聞き手が嘘をつく」ということを話し手が好ましいと思っていないことが共有されているにも関わらず,「嘘つけ」が発話されることにより，命令内容への好ましさの関わる前提が違反されている。これらの違反は，よく知られた Gricean Maxims（Grice 1975）の公理（具体的には質の公理（Maxim of Quality)）に対する違反であり，ここから各前提と反対の解釈（＝話し手は「聞き手が嘘をつく」という（i）既に起こったことについて（ii）好ましく思っていない）がなされる。

しかしながら，以上のような語用論レベルの説明に依存すると，英語の命令文においても日本語と同様の修辞的解釈を許すことになり，事実に反した過剰生成の問題を引き起こす。したがって，日英語の命令文の修辞的解釈の有無の差を正しく予測するためには,（語用論的説明を採用するにしても,）先の語用論的推論が「意味論的前提の違反」をシグナルとする以上，各言語の命令文の意味構造の差を見出す必要があるだろう。

現状においては，ミニマル理論とモーダル理論の双方ともに日英語の当該の現象に対する包括的説明は困難ではあるものの,「命令文のモーダル的意味は意味論のレベルに依らない（＝全て語用論のレベルで処理される)」とするミニマル理論に比べて，命令演算子という意味論レベルの構成要素を仮定するモーダル理論の方が，各言語間の差をモーダルの持つ意味の違いとそれに伴う可能な語用論的推論の差から導き得る点において，将来的に説明可能性が高いと考えられる。

5. 結語

本稿では，英語と日本語の命令文の意味論的な制約の差を観察した上で，各データに対する既存の理論の問題点を指摘した。

残された最大の課題は,「なぜ日英語の命令文でこれらの差が生じるのか（命

令文においてこれらの差が生じるのは言語間のどのような特徴に起因するのか)」を明らかにすることである。理論的課題としては，2つの理論の精緻化，あるいは統合による，問題となっていた各データの再検討が求められるだろう。どのような理論や仮説を採用するにせよ，日英語以外の様々な言語や方言における命令文の振る舞いを慎重かつ多角的に観察することで，命令文の意味研究の次のステップ，すなわち「自然言語における命令文の意味的普遍（semantic universals）とは何か」という根源的問いに答えることを目指す必要がある。

謝辞：

本研究はJSPS科研費（No. 20J00175）の助成を受けた。

注：

1 正確には，Portner（2004）以前にも同様のアプローチは存在する（Davies 1986, Han 2000など）。これらの研究を含む現在までの命令文研究を概観したものとしてはvon Fintel & Iatridou（2017）やKaufmann（2021）などがある。

2 田川（2019）では「愚痴命令文」，Ihara（to appear）では “past imperatives” として定されている。

3 オランダ語でも同様の観察が報告されている（Mastop 2005, Schwager 2011, Kaufmann 2012）。

4 英語でも「話し手は命令内容について好ましくないと信じている」という点だけ見れば，譲歩の用法の命令文として成立することが可能あると思われるが，それでも「発話時点において命令内容が未実現である」と同時にこれを満たすことはできない。

5 TDLのフォーマルな定義についてはPortner（2007）参照。

6 各種前提を含めた命令演算子の形式的意味については Kaufmann（2012,（63））を参照。

7 より具体的には，PortnerのTDLモデルにおいてTDLに追加されるコンテンツは発話文脈から見た未来の時点において成立するものに限られており，Kaufmannの定義する命令演算子は命令内容が発話時点よりも過去の時点に成立してはならないという前提を持つ。

8 この場合，Kaufmann（2012）も述べているように，過去事象をとるタイプの命令文を命令の発話行為としては扱わず，他のタイプの発話行為（例えば，*Reproach*（Kaufmann 2012: 103）など）として定義することもあり得る。

9 オランダ語の命令文は日本語と同様に過去事象に言及できることが知られている（Mastop 2005, Schwager 2011）。

10 von Fintel & Iartidouは，e-IaDについてはPortnerのTDLの枠組みでは強すぎる（すなわち，e-IaDの場合に前件部の命令文が聞き手のTDLにプロパティを追加するとは直感的には考えにくい）ことを認めており，ミニマル理論をPortnerのバージョンよりも弱くするという解決策を提示している。Portnerでは命令文の談話効果はTDLをアップデートすることであったが，von Fintel & Iartidouでは命令文は“endorsement set” のような「好ましい行動」の集

合にコンテンツを追加するものとしており，これによってe-IaDの前件として機能することを捉えている。

引用文献：

Condoravdi, Cleo and Sven Lauer (2012) Imperatives: meaning and illocutionary force. *Empirical Issues in Syntax and Semantics* 9: 37–58.

Condoravdi, Cleo and Sven Lauer (2017) Conditional imperatives and endorsement. *Proceedings of NELS* 47: 185–204.

Davies, Eirlys (1986) *The English. Imperative*. London: Croom.

Davis, Christopher (2011) *Constraining interpretation: Sentence final particles in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts-Amherst.

Farkas, Donka and Kim Bruce (2010) On reacting to assertions and polar questions. *Journal of Semantics* 27: 81–118.

von Fintel, Kai and Sabine Iatridou (2017) A modest proposal for the meaning of imperatives. In: Ana Arregui, María Luisa Rivero and Andrés Salanova (eds.), *Modality across syntactic categories*, 288–319. Oxford: Oxford University Press.

Grice, H. Paul (1975) Logic and conversation. In: Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics* 3: 41–58. New York, NY: Academic Press.

Gunlogson, Christine (2003) *True to form: rising and Falling declaratives as questions in English*. New York: Routledge.

Han, Chung-hye (2000) *The structure and interpretation of imperatives: Mood and force in universal grammar*. New York, NY: Garland.

Ihara, Shun and Yuya Noguchi (2019) Imperatives with/without necessity. In: Shin Fukuda, Mary Shin Kim, and Mee-Jeong Park (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 25: 103–116. Stanford, CA: CSLI Publications.

Ihara, Shun and Mana Asano (2020) Rhetorical imperatives: expressing anti-preferences. In: Michael Franke, Nikola Kompa, Mingya Liu, Jutta L. Mueller, and Juliane Schwab (eds.), *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 24: 377–391. Osnabrück University.

Ihara, Shun (to appear) Division of labor between semantics and pragmatics of canonical and non-canonical imperatives. 言語研究 (*Gengo Kenkyu*) [Language Research]. Tokyo: The Linguistic Society of Japan.

Jeong, Sunwoo (2018) Intonation and sentence type conventions: Two types of rising declaratives. *Journal of Semantics* 35 (2) : 305–356.

Kaufmann, Magdalena (2012) *Interpreting imperatives*. New York: Springer.

Kaufmann, Magdalena (2021) Imperatives. In: Daniel Gutzmann, Lisa Matthewson, Cecile Meier, Hotze Rullmann, Thomas E. Zimmerman (eds), *The Wiley Blackwell Companion to Semantics*. Hoboken, New Jersey: Wiley-Blackwell.

郡史郎 (1997)「日本語のイントネーション―型と機能」国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫 (編)『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』, 169–202. 三省堂.

Kratzer, Angelika (1981) The notional category of modality. In: Hans-Jürgen Ekmeye and Hannes Rieser (eds.) *Words, worlds, and contexts: New approaches to word semantics*, 38–74. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

Mastop, Rochus Jacobus (2005) *What can you do?: Imperative mood in semantic theory*. Ph.D. thesis, University of Amsterdam.

Medeiros, David J. (2013) *Formal approaches to the syntax and semantics of imperatives*. Ph.D. thesis, The University of Michigan.

森英樹 (2006)「3つの命令文：日英語の命令文と潜在型／既存型スケール」言語研究 (*Gengo Kenkyu*) 129: 135–160. 東京: 日本言語学会.

Ninan, Dilip (2005) Two puzzles about deontic necessity. In: Jon Gajewski, Valentine Hacquard, Bernard Nickel and Seth Yalcin (eds.) *New work on modality: MIT Working Papers in Linguistics* #51, 149–178. Cambridge, MA: MITWPL.

Oikonomou, Despina (2016) *Covert modals in root contexts*. Ph.D. Thesis, MIT.

Oshima, David Y. (2014) On the functions of the Japanese discourse particle yo in declaratives. In: Erin McCready, Katsuhiko Yabushita, and Kei Yoshimoto (eds.) *Formal approaches to semantics and pragmatics*. 251–271. Heidelberg: Springer.

Portner, Paul (2004) The semantics of imperatives within a theory of clause types. *Proceedings of SALT* 14: 235–252.

Portner, Paul (2007) Imperatives and modals. *Natural Language Semantics* 15: 351–383.

Portner, Paul (2012) Permission and choice. In: Günther Grewendorf and Thomas Ede Zimmermann (eds.) *Discourse and grammar: From sentence types to lexical categories*. 43–68. Boston/Berlin: Walter de Gruyter.

Portner, Paul (2018) Commitment to priorities. In: Daniel Fogal, Daniel Harris and Matt Moss (eds.) , *New work on speech acts*, 296–316. Oxford University Press.

Rudin, Deniz (2018) Rising imperatives. *Proceedings of SALT* 28: 100–119.

Saito, Mamoru and Tomoko Haraguchi (2012) Deriving the cartography of the Japanese right periphery: the case of sentence-final discourse particles. *IBERIA: An International Journal of Theoretical Linguistics* 4: 104–123.

Schwager, Magdalena (2011) Imperatives and tense. In: Renate Musan and Monika Rathert (eds.) *Tense across languages*, 37–58. Berlin: Walter de Gruyter.

Stalnaker, Robert C. (1978) Assertion. In: Peter Cole (ed.) *Syntax and Semantics* 9: 315–322. New York: Academic Press.

Starr, William (2011) *A preference semantics for imperatives*. PhD dissertation, Rutgers University.

田川拓海 (2019) 独話に現れる愚痴命令文と反実性.『日本語文法』19 (2) : 126–134. 日本語文法学会.

Venditti, Jennifer J. (2005) The J_ToBI model of Japanese intonation. In: Sun-Ah Jun (ed.), *Prosodic typology: The phonology of intonation and phrasing*, 172–200. Oxford: Oxford University Press.

On properties of imperatives in English and Japanese and their semantic constraints

Shun Ihara

Abstract:

Recent studies on natural language semantics of imperatives have been concerned with the semantic structure from which imperative clauses derive their various interpretations (e.g., Portner 2004, 2007, Kaufmann 2012, Condoravdi & Lauer 2012, von Fintel & Iatridou 2017, among many others). However, almost none of the studies have yet to find a clear answer to the fundamental question of what part of the natural language system is responsible for the differences and commonalities in imperative sentences found in different languages.

In this paper, I clarify the differences in semantic and pragmatic behaviors between Japanese and English imperatives from various perspectives with a comprehensive reference to the results of the studies to date. Specifically, I focus on the following perspectives: (i) the question (rising) intonation, (ii) the indifference reading, (iii) the past-imperative reading, (iv) the endorsement in IaDs, and (v) the rhetorical interpretation. Moreover, I show that the two competing theories of the semantics of imperatives both face the problem of not being able to explain the differences between the two languages in a unified way. The results contribute not just to semantic and pragmatic description of imperatives but also to provide a foothold for answering the theoretical question posed earlier.

Keywords: semantics, pragmatics, imperatives, English, Japanese
キーワード：意味論，語用論，命令文，英語，日本語